いのちと地域を守る

収録の打ち合わせをする板橋さん（左）と今村所長＝2月6日、仙台市青葉区のエフエム仙台

防災 柔らかく伝え18年

エフエム仙台「SUNDAY MORNING WAVE」

考える

日曜の朝、爽やかな音楽とともに防災に役立つ情報が宮城県内でオンエアされている。その番組はエフエム仙台の「SUNDAY MORNING WAVE」＝?＝。東日本大震災を挟んで足かけ18年続く、全国でもまれな息の長い防災番組だ。

「命救うため息長く」

「東日本大震災の被災地で震災遺構、伝承施設が整備されています。当時の状況を知り、みなさんで津波対策を考えてください」

仙台市青葉区のスタジオで3月3日、看板コーナー「地震に自信を」の収録があり、東北大災害科学国際研究所の今村文彦所長はマイクに語った。中学生にも分かるような、かみ砕いた表現を心掛けている。

番組は2003年10月、今村所長と、当時、エフエム仙台制作部次長の高橋英彦さんを進行役にスタートした。ちょうど宮城県沖地震の30年以内の発生確率が99%とされ、備えの機運が芽生えた時期だった。

04年4月に高橋さんが降板し、同社防災・減災プロデューサーの板橋恵子さんが後を継いだ。当時、防災の知識はゼロ。「知らないことは質問してリスナーと一緒に学ぶ。その姿勢は今も変わらない」と言う。

「何げなく聞くうちに防災の知識が身に付く番組を目指している」とも。冒頭は週末情報などの話題から入り、コーナーの合間には日曜の朝をイメージしたクラシック、ラテン音楽、ジャズを流す。防災にありがちな堅苦しさはない。

テーマは地震、津波が中心。震災発生直前にも、貞観地震（869年）、慶長三陸地震（1611年）など過去の地震津波を紹介し、備えを呼び掛けた。

しかし、震災では宮城県内だけで1万760人が犠牲になったほか、避難所や避難中の車が被災するといった課題も浮き彫りに。震災1カ月後に放送を再開した2人にとって、番組の意義はさらに増した。

調査研究、行政などの委員で多忙な今村所長だが、番組への思い入れは特別で「防災に関心が高い人だけでなく、移動中や作業中の人も含めてさまざまな人に伝えられる」とラジオの可能性に期待する。「毎週の放送を通して、地域や課題ごとの対策をきめ細かく発信したい」と話す。

板橋さんは「もっと救えた命があったと、震災でメディアの責任を感じた。次の災害で犠牲者を減らせるように、できるだけ長く番組を続けたい」と誓う。

?SUNDAY MORNING WAVE　毎週日曜午前8時25分～55分に放送。「地震に自信を」のほか、外国籍の市民らが各国の防災事情などを紹介する「GLOBAL TALK」、災害や防災の専門家が研究成果などを解説する「東北大学防災UPDATES!」の3コーナーで番組を構成する。

「SUNDAY MORNING WAVE」の歩み

2003年10月	「地震に自信を」コーナー開始
05年6月	わが家の地震防災ハンドブック発行
11月	「GLOBAL TALK」コーナー開始
06年10月	第1回みやぎサバ・メシコンテスト開催（10年まで5回開催）
09年8月	「東北大学防災UPDATES!」コーナー開始
11年3月	東日本大震災発生
4月	約1カ月ぶりに放送再開
12年3月	サバ・メシ防災ハンドブック発行（以後毎年発行）

「サバ・メシ」食事を切り口に関心促す

エフエム仙台「SUNDAY MORNING WAVE」から生まれた防災事業に「みやぎサバ・メシコンテスト」がある。

サバ・メシはサバイバルと飯を合わせた造語。2006年から10年まで計5回、災害時にカセットコンロで簡単に作れる非常食のアイデアを募った。

同社防災・減災プロデューサーの板橋恵子さんは「身近な食事を切り口に防災に関心をもってもらおうと企画した」と狙いを語る。

コンテストで最高賞に選ばれたある家族は、参加をきっかけに家族で地震対策を話し合い、震災で生かしたという。「いさかなりとも役立ったことがうれしかった」と板橋さん。

震災後はコンテストを休み、12年から毎年「サバ・メシ防災ハンドブック」を発行。レシピのほか家庭、地域、職場で身を守るポイントを掲載し、防災イベントなどで配布している。板橋さんは「震災の教訓を思い出してもらう意味でも将来、コンテストを復活させ、実体験に基づくレシピを募集したい」と話す。

伝える

2011.3.11

■家に閉じ込められ9日後救出（石巻市）

東日本大震災発生時、高校生だった石巻市の阿部任（じん）さん(25)は家ごと津波に流された。一緒にいた祖母(89)と屋内に閉じ込められ、9日後に救出された。

阿部　任さん

当日は通っていた仙台市の高校が休みで、石巻市門脇の実家にいました。あまりに大きな揺れに、宮城県沖地震が起きたと思いました。

揺れが収まった後、祖母と2階で片付けなどをしていました。1階に降りると、ガラス戸越しに真っ黒い水が見えました。次の瞬間、水はガラスを破って流れ込み、バリバリと木が裂けるような音とともに家が揺さぶられました。

2階に逃げ、高さを確保しようと台所のシンクに上った後、祖母をテーブルに引っ張り上げました。足元まで水が迫り、夜は寒くて一睡もできませんでした。

水が引いたのは翌朝です。自分と祖母は壁や柱に挟まれた狭い空間にいて、屋根には穴が空き、床は傾いていました。圧縮袋に入っていた布団を見つけて祖母に掛けました。つららが下がるほど寒かったので、布団は祖母の体力を保つのに役立ちました。

3日目に祖母の携帯電話を使って、一瞬だけ兄と連絡が取れました。「実家の居間に祖母といる」と言うと、兄は「すぐ行く」と応じました。でも救助は来ませんでした。

後で聞くと、母と兄は家にたどり着きましたが、土台しか残っていなかったそうです。家は北東に100㍍流され、自分たちは全く別な場所にいたのです。

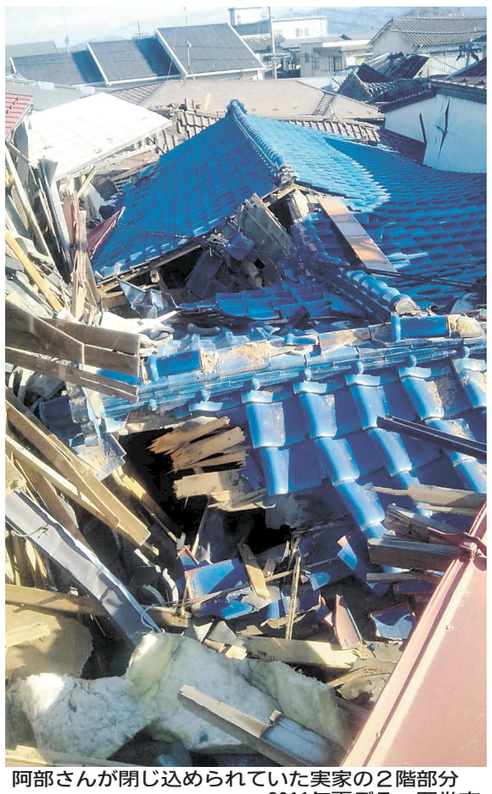
冷蔵庫の中にあった水やヨーグルト、ビスケットを食べて空腹をしのぎました。助けはいつか来るだろうと、あまり不安は感じませんでした。部屋にあった漫画を読んで気を紛らせました。

5日目に凍傷で足が痛み始め、日を追って感覚がなくなりました。壁がはがれた部分を探し出し、はりを伝って屋根に出ました。周囲には見知らぬ景色が広がり、思いもよらない方角に海が見えました。通りがかった男性2人が私に気付いて助けを呼んでくれて、祖母と病院に運ばれました。

世間では「奇跡の救出」といわれましたが、自分は恥ずかしい思いでいっぱいでした。1960年のチリ地震津波でも門脇は被害がなく、津波が来ると思いませんでした。近くには日和山に上る階段があり、すぐに逃げればこんなことにはならなかったはずです。

地元のまちづくりに役立つ仕事をしたいと考え、石ノ森萬画館に就職しました。若者の語り部グループに参加し一昨年春に活動を始めました。自分は避難しなかったため、被害に遭いました。私の失敗談を、次の災害に備えるきっかけにしてほしいと思います。

避難せずに被災 失敗



阿部さんが閉じ込められていた実家の2階部分＝2011年夏ごろ、石巻市

探る

■自然の脅威と闘う歴史再構築

災害への抵抗力強化

東日本大震災を契機に、歴史学者として過去の災害と人間との関わりを強く意識するようになった。事前の備えから復興までの災害対応を軸に文明史を再構築すれば、「災害文明史」という切り口で、新たな人類の発展過程を示せるのではないだろうか。

震災後、津波を伝える石碑や「津波てんでんこ」といった災害文化を再評価しようという動きが強まったが、視野を広げると災害文化はありとあらゆるところに存在する。そういう意味では、自然の脅威と闘ってきた人類の歴史自体が災害文化だと言える。

建物を例に挙げると、自然や野生動物のリスクを避けて、人類は洞窟で生活を始めた。新潟県にある縄文時代の竪穴住居は屋根の傾斜が急で、雪で建物がつぶれない工夫がされている。

奈良県の法隆寺五重塔は揺れに強い柔構造で知られる。1609年に建てられた宮城県松島町の瑞巌寺本堂は、平成の修復工事で、壁の内側から耐震性を高める筋交いが見つかった。

インフラ整備では戦国時代以降、大名たちが治水事業を手掛けた。登米市の北上川には、領主が洪水対策で整備した相模土手が残る。流域の旧家は屋敷を1～2㍍盛りして浸水を防ぐ「水山」が施され、庶民も自衛策を講じていた。

ただし、大震災の津波でコンクリートの巨大な防潮堤が壊れたように、人間社会が災害を完全に克服するのは難しい。それほど自然の驚異は多様で深刻だ。

だからこそ、人命と暮らしを守り、経済活動を持続させるために、防災・減災の取り組みを強めることと、被災した場合にはより高い安全性を確保した復興が大きな課題になる。

人類史を研究する際、自然科学に法則があるように、社会や歴史にも法則があるのではないかという観点からグランドセオリー（あらゆる領域で応用できる一般理論）が作られてきた。ただし、これまでは経済や政治が中心だった。

繰り返し襲ってくる災害に対し、人間社会は現在、大きな発想の転換を迫られている。災害文明史にこそ、新しいグランドセオリーの可能性があると考える。

セオリー化には災害と人間の関係を大局的に捉える視点や、知られていない災害文化の発見と再評価、蓄積などが必要になる。過去の地震津波の研究が、古文書と地層の津波堆積物を照合することから始まったように文理融合も重要だ。

災害への抵抗力がある社会の実現は簡単には進まないが、先人の復興の歩みをたどり、苦労や成果を学ぶことで、将来に役立つ知恵を示せる。学問は純粋に学術的であることが大原則。一方で研究者として被災地に希望を与えることができる存在でもありたい。

宮城学院女子大学長
平川　新さん

ひらかわ・あらた　1950年、福岡県出身。東北大大学院文学研究科修士課程修了。専門は江戸時代史研究、歴史資料保存学。2012年設立の東北大災害科学国際研究所の初代所長を経て、14年4月から現職。69歳。

現場から

自主防災組織の強化課題

岩手県紫波町消防防災課長　熊谷　欣弥さん(50)

企業や団体と協定を結んで災害への備えを進めています。本年度は災害廃棄物の処理、電気自動車やドローンの優先提供などを取り決めました。町全体では年1回の防災訓練、各地区のリーダー向け研修会などを続けています。

自主防災組織の強化が今後の課題。組織率100%を目指すとともに、既に組織化した地域には避難計画の策定を呼び掛けています。発生しやすい災害の種別や要支援者の有無を住民同士で確認するのが狙いです。地区の特性を知って訓練を続けることが、犠牲者を出さないまちづくりにつながると考えています。

津波想定し図上訓練実施

宮城県築館高人のためプロジェクト委員長　佐々木　淳さん(17)

昨年8月に宮城県であった全国防災ジュニアリーダー育成合宿で、岩手・宮城内陸地震でできた「荒砥沢崩落地」（栗原市栗駒）のガイドをしました。全国から参加した中高生たちは皆、地滑りの規模に驚いており、あの地震のすごさを自分も再確認できました。

育成合宿では、災害時の避難対応などをグループで議論する災害図上訓練（DIG）について学びました。昨年秋の校内の防災訓練に併せて、自分たちも津波を想定したDIGに取り組みました。液状化現象への対応など、参加した人たちの考えが分かり勉強になりました。